

Flow Analysis VIII 報告記

エフ・アイ・エー機器株式会社 樋口慶郎

1. はじめに

Flow Analysis VIIIがポーランドの首都ワルシャワで、2000年6月25日から29日まで開催され、筆者もこれに参加した。ちょっと前までは、国際会議など自分には無縁な存在に思っていたが、先生方の公私にわたる心強いサポートをいただき、このところ続けて参加させていただいている。さて、前回チェコの首都プラハで開催された国際会議(ICFIA)の報告記(板橋英之先生著、群馬大学)を皆様お読みになられて、どのような感想をお持ちになったのでしょうか。筆者も足軽隊の一員として参加していたのだが、今読み返しても思わずあの時の光景を思い出し、一人笑ってしまうほどである。実にうまく描写されていたし、それだけ書かねばならないことが強烈であった。さて、今回はどうであったか…、もちろん正式な内容については酒井忠雄先生(愛知工業大学)が執筆された、ぶんせき10月号をお読みいただいて、筆者も前回の報告にならって、私的な感情をこめた道中記風に今回の国際会議を紹介させていただくことにする。

2. 旅の幕開けは「ビザいらないですよね」

JFIAの講演会と合同で開催されているICFIA(International Conference on FIA)では、ここ数回たいていの場合、本水昌二先生(岡山大学)、酒井忠雄先生を団長に、数名の観光班班長(誰かのご想像にお任せ)がいて、筆者を含めた足軽隊(前回道中記参照のこと)がくっついていって、現地でも活動するという組織体制がほぼ確立しつつあった。いつもは誰か任せで、事前にあまり旅行書など見ない筆者は、たまたま出発前夜「地球の歩き方」を読んでしまった。今思うとやめておけば良かった、何とそこには「ビザが必要」と書いてあるではないか。これは、きっと古い本だろうと思って確認すると1999~2000年版である。「誰もそんな事言っ

たそ、自分だけ知らなかったのかな、本当なら国際会議にいけないじゃないか、どうしよう」と悩むより先に足軽隊長の自宅に、真夜中電話をかけてしまった。あなたが成田出発組では一番遠くから集まってくるのでしたね、そして当然、翌朝4時起床に備えてお休み中でした。板橋先生ごめんなさい。でも、私も安心して眠れました。さあ、出発だ。

3. チェック体制はあれでいいのか ーパリ、ドゴール空港よ

今回も筆者等のグループは成田組と関空組に分かれて日本を発ち、パリで合流してワルシャワへと向かう予定であった。我々はこれまでの旅行において、トランジットでは幾多の試練に見舞われたものの、それを乗り越えて、少しずつ強くなっていた。パリの空港の案内掲示には大いに戸惑い、かわるがわる複数の人間が、別々の地上係員に尋ねながら目的の待合室にたどり着いた。そして、関空組が離陸寸前になって搭乗してきても、とりあえず全員同じ飛行機に乗れたのだからよしよし、そのくらいのたくましさは身についてきた。しかし、パリでの入国審査のイージーさは、まあ許すとして、搭乗前の荷物とボディチェックの甘さには一同驚きと不安で言葉がなかった。まず、荷物は自分で機械に通す、係員はいるのだが誰も見ていない。金属探知のゲートをくぐると、ピーピー鳴ろうがそのまま通っても何も無い。心ある人は、時計を外したり、コインを出したり、何度も何度も自分でトライしている。「事故が起こってからでは遅いのだぞ」と係員に日本語で一応、注意を促してワルシャワに向かった。

4. ワルシャワ最初の夜は歓迎の花火が

ワルシャワ空港では、今回のワルシャワ滞在中たいへんお世話になった旭テクネイオン(株)現地

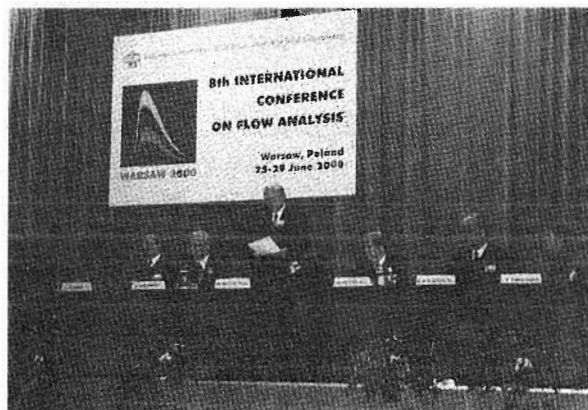
駐在員, Jerzy Tumilowicz 氏 (日本語での呼び名はユーレックさん) の出迎えを受け, 別便で到着された相原, 平田両先生らと一緒に, Europejski Hotel に到着して Flow Analysis VIII 本番に備えることとなった。昨年プラハの「まあ寝るだけじゃからええじゃろー」で一躍有名となった(?) クリスタルホテルに比べれば, 今回は快適なホテルライフが送れる予感のする部屋であった。恒例により早速, 団長の部屋に集合して, ミーティングに移った。日付が変わってしばらくすると, どこか懐かしい音が聞こえるではないか。全員窓の外を見ると日本では見慣れた花火があがっていた。その時は, Flow Analysis VIII もずいぶん粋なことをするなあと, その歓迎ぶりに並々ならぬ熱意を感じずにはいられなかった。後で聞いてみると, ちょうどその日が 1 年で昼の時間が一番長い日で, それを市民で祝う花火であったそうで, これもまた粋ではないか。

5. Flow Analysis VIII

日本からは, 本水昌二 (岡山大), 石井大道 (熊本工大), 松本清, 今任稔彦 (九州大), 受田浩之 (高知大), 相原将人 (近畿大), 平田静子 (中国工研), 八尾俊男 (大阪府大), 酒井忠雄, 手嶋紀雄 (愛知工大), 北森武彦, 久本秀明 (東京大), 成澤芳男 (元立教大), 板橋英之 (群馬大), 伊藤純一 (北見工大) の諸先生方と讃岐三之助, 島田勝久 (サヌキ工業) 氏そして筆者の総勢 18 名 (東京大学から H.M.Sorouraddin 氏も参加して総勢 19 名) が参加, 発表を行なった。

現在, FIA の国際会議としては, ほぼ毎年開催される ICFIA と 3 年に一度の Flow Analysis が

ある。ICFIA の方は人情味あふれる Christian 先生と奥様の Sue さんを中心にたいへんフレンドリーな国際会議という印象が強く, 筆者も自分の英語力を無視して無謀にも過去 2 度, 口頭発表をさせてもらったことがある。もちろん座長を担当してくれた本水, 酒井両先生と協調性のある質問をしてくれた同志のおかげであることは言うまでもない。一方, Flow Analysis は ICFIA より一回り規模が大きく, 世界各国から研究者が集まる国際会議というイメージを持っていた。筆者は 1991 年熊本で開催された第 5 回に参加しただけで今回が 2 回目であり, 身に余る行動は慎み, ポスター 1 件をもって参加した。今回の第 8 回は公式に発表された参加者の国別内訳では, 地元のポーランドが 53 名で最も多く, 次いでスペイン (26 名), ブラジル (20 名), そして 4 番目が日本 (19 名) で, 地理的なことを考慮すれば, FIA における日本の存在を強く示す数字であると思う。参考までに, 以下ポルトガル (14 名), ドイツ (10 名), アメリカ (10 名) となっている。このように世界各国から集まった研究者が, ワルシャワの地で一堂に会し, 会議が進んでいくわけであるが, この貴重な経験を自分自身どう生かすことができるのだろうか。筆者の立場では, 研究ばかりやられている事情ではないことはお察しいただけるかと思う。その中で国際会議の雰囲気を楽しむながら, 自分にとっての FIA が見つければ最高だなと思いつつ, 毎日会場に通った。発表を通じて自分と同じような仕事をやっているグループが結構あるのには驚いた。ブラジルのグループのポスターの前で, 若い女性の発表者と身振り手振りで話し込んでいると (もしかしたら話にはなっていな



かったかもしれないが)、ポスの先生がお出ましになり、あれも見ろ、こっちのポスターも見るとポスターのはしごをさせられてしまった。国際会議に参加しはじめた頃を思い出すと、ポスターを見ても遠くから眺めるだけで言葉を発せず、自分の発表でも、3歩下がって第三者を装っていた。その頃に比べれば進歩かなと思うのであった。

全体的には日本の学会でも最近そうであるが、本会議でもポスターの体裁が美しく、かつアピールする機能性に優れたものが多くなっているのには驚いた。そんな中で、ポスタープレゼンテーションの最優秀賞に久本先生、2位に石井先生が選ばれたことは、同じ日本人として大きな喜びであった。

世界中からたくさんの国の人が集まるといえば、26日夜、ピクニックと称するバーベキューパーティーがあった(ピクニックとはいってもバスで連れて行かれたのであるが)。その晩は寒くて、暖をとりながら、ビール、ワインを口にした。いつの間にか生演奏が流れ出したと思いきや、その前では多国籍ダンスがはじまり、それが結構ハードである。こんな時、なんとなく国民性が反映されるものであるが、誰か火をつける人がいれば、基本的には仲良く、熱く燃えるのであった。昨年、チェコで実証済みの我が「日本ダンサーズ(メンバーは想像してみてください)」も、新顔を加え充分目立っていたことを報告しておく。



6. ワルシャワの町と人々

FIA 国際会議としては前回のチェコに次いで2回連続してヨーロッパでの開催となった。前回はア

メリカとは違う外国に初めて触れ、特に歴史の重みを感じる風景に大変感激してしまった。歴史という点では今回訪れたワルシャワは不幸な運命を背負ってきたのかもしれない。プラハの街並みとは違った雰囲気を感じた。しかし、総じて女性が美しいことに、またまた感動してしまうのは私だけであろうか。食事は、比較的日本人の口に合う方ではなかったか。面白かったのは「餃子」が食べられたことで、外観は全く日本の蒸し餃子、水餃子と同じで、ただ違いは、中身にブルーベリージャムのような甘酸っぱいものが入っているところで、これをつまみにワルシャワビールもなかなかのものであった?。

筆者にとってワルシャワでの最大の思い出といえば、前述のユーレックさんのご自宅に、板橋、手嶋両先生とともにおじゃましたことである。市街地から車で約30分くらい走ると、大きな塀に囲まれた一角がある。まず、その扉を開けて中に入ると、美しく、どこか見覚えのある中庭があり、それを囲むようにして5、6階建ての建物があった。ユーレックさんの話によると彼の住む棟の中庭は日本庭園を真似て作られたもので、他にも各国の代表的な庭を再現して、そのまわりを建物が取り囲むように建っているそうである。外側の扉、棟の入り口、部屋の入り口と何重ものセキュリティーの中、部屋に通された。ユーレックさんの家族は、英語の先生をしている奥様と2人の娘さんがいる。娘さんが小さな頃に家族で北九州市に住んでいたこともあり、ユーレックさんご自身は日本語に堪能で、我々の話は100%理解していただけた。ビールを飲みながら食事をし、娘さんたちも交えてデザートケーキをい



ただきながらいろんな話をした。遠い外国にいながら、しばし、日本にいと何ら変わらない家族の幸せな雰囲気を感じさせてもらった。一同、大感激の晩餐であった。

ユーレックさんには到着から、滞在中の観光、食事、出発まで本当にお世話になった。ワルシャワ空港を出発する時、最後の一人が空港ロビー内に入るまで見守り、手を振って見送ってくれた。その優しさに感動しつつ、ワルシャワをあとにした。あらためてユーレックさんご家族の皆様へ感謝の意を表します。

7. 国際会議へ参加する意義とは

筆者にとっての国際会議は、もちろん純粋に勉強の場、自分を主張する場、そして企業の立場では、研究や市場性の動向を探る場であり、ある意味、自分の製品をアピールする場、商売の場でもある。しかし、筆者は国際会議に別の面での意義も持って参加している。それは、長時間の飛行機からはじまって、ホテルでの滞在、食事、夜のミッドナイトミーティング…など、もしかすると24時間、同行して

いる先生方と常に一緒に過ごすことができる、言い方を変えれば先生方を占有できるという点である。これは国内の学会ではなかなか経験できないことであり、その中で得られる情報や先生方からの教えなどが、自分の仕事や研究に大変役立つことは言うまでもない。そして帰ってきて日常生活に戻っても、また半年くらいは何があってもがんばれる、そんな元気をもらうことができる。それが筆者にとっての国際会議である。

8. おわりに

次回 Flow Analysis IXは2003年オーストラリアで開催されることが決まった。その前に、来年の2001年12月にはICFIAがタイ国チェンマイで開催される予定である。チェンマイ大学 Dr. Kate Grudpan は、今年の分析化学会年会（岡山大学）に特別参加され、筆者は成田空港からお世話させていただいた縁もあり、参加する予定である。すばらしい観光企画もあるそうで、多数の方々と一緒にできることを願っております。